毛利藩における宮市宿本陣^{こうべ}兄部家について

HON-JIN AT MIYAICHI STAGE IN MOURI-HAN DURING EDO ERA

岡田 悟*
Satoru OKADA

Hon-jin was a lodging used by feudal lords in Edo era. Miyaichi was a stage of both Sanyou Road and Hagi Road in Mouri-han and Koube managed the hon-jin. While a lord was staying at hon-jin, the main part of hon-jin building was occupied as a dwelling of a lord and followers and cookroom. The spare house that Koube family could use while a lord was staying was not prepared. Lords entered this hon-jin by way of the garden in front of the main room, Gozama. So, Genkan was not used as an entrance of lords.

Keywords: Hon-jin, lords, lodging, Mouri-han, Miyaichi
本陣, 大名, 休泊施設, 毛利藩, 宮市

1. はじめに

毛利藩内に設けられた藩主休泊用の施設の概要については、前稿（*注1）で触れ、そうした施設の例として三田尻御茶屋を対象に、その建築実態、歴史的変遷を明らかにした。一方、毛利藩内を山陽道が通過し、その宿駅には参勤交代をする九州の諸大名等が休泊に利用する施設もまた必要とされた。今回採り上げる宮市宿は、『防長風土注進案』（以降注進案と略称する）に「九州往還にて御大名様方其外御休泊之宿驛」とあるように山陽道の宿駅であった。同時に、城下町萩から山口を経て三田尻御船倉を結ぶ萩往還（毛利藩主参勤路）もまたこの宮市を通っていた。この状況を注進案絵図（図2）によってうかがうと、宮市町は東西に走る山陽道に沿って東から前小路、中市、新町、今市によって構成され、北には防府天満宮が控え、その門前町としての性格も兼ね備えていた。一方、萩往還（図2では山口街道と記されている）は北西から鯖川（佐波川）を渡り町の西端で山陽道に合流し、東進して天満宮前で右折し三田尻へ向か

っている。従って、宮市町の内、今市、新町、中市の区間は山陽道と萩往還が重複していることになる。

注進案には中市に御本陣として兄部盤右衛門が、新町に脇本陣として中村善左衛門および市川五郎左衛門の2軒が記されている。本陣兄部家には藩政期の建築が遺されていて、史跡に指定され、同家に伝えられる文書を中心とした調査結果が発表されている（文献2）。しかし、詳細な建築史的な調査は行われず、建築年代も不明なままであり、修理工事報告書（文献7～9）、学会発表（文献14）、著書（文献11～13）等の、関連する数多くの研究成果と照らし合わせて検討することが不可能であった。

兄部家は現在JR山陽線防府駅北方約1km程の所にあり、前述の三田尻御茶屋遺構とは、防府駅を中心とする市街地の中に、共に取り込まれている（図1）。しかし、藩政期には、図2に描かれるように宮市と三田尻は間に田園地帯を挟む別の集落であった。性格も、御船倉、勘場、御茶屋等の藩施設を中心とする港湾行政都市であ

* 共立女子短期大学生活科学科 講師・工博

Lecturer, Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

図1 現状地図

図2 注進案絵図（三田尻村荒図+西佐波荒図）

写真1 兄弟家主棟西側部分（北側街道面）

写真2 兄弟家主棟東側部分（南側）

った三田尻に対し、本陣、2軒の脇本陣、天満宮等を中心とする宿駅門前町であった宮市と、異なっていた。しかも、以下に述べるように、三田尻御茶屋に建てられていた建物を兄部家へ移築した、という記述が見られ、これの確認も未だなされていなかった。

以上の状況を基に、本稿では、まず、兄部家遺構の現状を報告し、次に、絵図や文献、および、前稿で得られた三田尻御茶屋に関する知見を基に建築年代ならびに移築の真偽を明らかにし、更に、休泊時における諸部分の使われ方の検討を通して、兄部家の本陣としての建築的特徴を考察してみたい。

2. 兄部家の現状

兄部家は山陽道の南側に位置し、天満宮入口から西へ150m程の所にある。敷地北側が旧山陽道に面する他、西側も横丁に面している。現状配置図(図3)から、街道に面して建つ、東側入母屋西側切妻棧瓦葺の本家(写真1)と、街道から奥まって建つ、寄棟棧瓦葺の書院(写真2)とが連結される形で主たる棟が形成されていることが知られる。寄棟屋根には、棟両端、および、隅棟端4カ所のうち2カ所の計4カ所の鬼瓦に、毛利家家紋である長門三ツ星が付せられている。書院の南北には庭園がしつらえられ、北側庭入口には街道に面して瓦葺袖塀付き棟門が設けられている。この門は昭和46年に台風によって破損した門を同じ位置に建て替えたものである(*注2)。これに対し、西側部分の背後には本蔵、道具蔵の他、多くの付属屋が建ち並び、東側とは様相を異にしている。

次いで、現状平面図(図4)を見ると、書院は北側に入側を備えた2列6室を中心とし、床の間や内雨戸の縁も含めて、よく旧状を遺している。この座敷部分の東に台所、浴室、便所等が付属し、現在住宅として使用されている。一方、本家は通り土間を遺すものの他は改変され車庫、店舗等に用いられている。東端1間半を除いてつし二階が設けられているが、現在は使用されていない。東側が書院造りの、そして、西側が町屋型民家の平面構成の特徴を示していることが知られ、これに対応して架構の状況も差鴨居の用い方等の点で両部分に差異が認められる。

3. 兄部家の建築の変遷

注進案によって兄部家の歴史を眺めると、鎌倉時代より「周防國合物商賣人等長職」を勤め、室町時代には「天満宮社役所勤」とあり、当地方きっての有力商家の家柄である。武士の休泊に関しては、「元和年中より上使御客屋と申名目ニ而、寛永拾九年よりは御大名様方御

本陣ニ被仰付罷在候」とある。一方、同家の『累代遺語抜萃』には「同記(与右衛門宗知君往事記)ニ曰ク、我が家御大名衆ノ御旅館トナリシ由来ハ、寛永九年長崎肥前豊前等エ御上使始テ陸地往来ノ時……当駅ハ祖父与右衛門直季、御馳走トシテ御旅館ヲ造営セリ、又寛文三年巡見ノ御上使往来ノ時、父与右衛門直久復ビ修復ヲ加エ御馳走セリ、此後遂ニ御大名衆ノ御旅館トハナレリ」(*注3)とあり、注進案の内容と異なっている。注進案は幕末の、また、『累代遺語抜萃』は明治初年の編纂であることから、藩政初期の事柄については共に信頼性に問題が残るところであるが、おおむね1600年代中頃には武士休泊の機能を果たしていたと考えてよからう。「上使御客屋」「御本陣」「御旅館」等と記される建物の実態は不明なものの、有力商家としての大規模な敷地、建物によってかかる機能を果たし得ていたと予想される。薩摩藩主島津氏宿札が遺されているように、参勤交代時の休泊に利用されたが、毛利藩主も藩内巡視時に天満宮祭礼見物を兼ねて、兄部家を利用するなどしていた(*注4)。この他、家業としての酒造業は、元和年間には始められていた(*注5)。

その後、寛政元年(1789)4月13日「周防国宮市町出火家数百廿戸焼亡」(文献4)と大火があり、この時兄部家も注進案に「寛政元酉ノ四月家宅類焼」とある如く焼失したが、続いて「三田尻御殿之内買拝領被仰付」とある。「三田尻御殿」は三田尻御茶屋を指し(*注1)、「之内」とあるところからその一部を「買拝領」即ち代金を払って譲り受けたということになる。この頃の三田尻御茶屋は、天明3年より側室や娘と共に居住していた7代藩主重就(天明2年に隠居)が寛政元年10月7日に死去し、それに伴って建物規模が大幅に縮小された時期に当り(*注1)、従って、余剰の建物の払い下げは十分あり得ることである。

一方『累代遺語抜萃』には、この寛政元年焼失後の再建について「右田御屋敷ヨリ從來ノ御由緒アルヲ以テ彼ノ城山ノ材木ヲ数多賜リタルニ由リ、他ニ先立ッテ本屋の造営ヲナセリ……即今本家結構ノ材木ハ皆此時ノ賜モノナリ」とある(*注6)。右田御屋敷とは「右田御屋敷ハ当時毛利大内蔵ト称セシ由ナリ」(*注6)とある如く藩主毛利氏と姻戚関係にあり右田の在郷屋敷を中心に1万6千石余を知行していた家老右田毛利氏を指し、城山とは右田村内に古城跡と伝えられる山を指す(*注7)。ここに示される右田毛利氏からの材木で建築したとする記述は注進案のそれと異なっており、この点の解明も必要となる。

藩政期における兄部家の建築実態を知り得る資料としては、

①同家所蔵の「宮市驛御本陣兄部盤右衛門処差図」(天保11年、図5)

- ②山口県文書館毛利文庫の「兄部三蔵家差図」(図6)
 ③注進案の「御本陣壹ヶ所 兄部盤右衛門」の記述(天保13年~弘化)

が挙げられる。図4、5、6を比較すれば、主棟に関する限り、基本的にこれら3種の図面は同一の建物を描いたものであることが容易に理解される。

注進案には兄部家が、本門、本家、書院、火除門、酒造蔵、同續酒造蔵、裏門の7部分に分けて記されている。本門は図5、6にも書き込まれ、台風で壊れた後もその位置は現在(図3)に受け継がれている。本家は「五間半梁桁行五間半、北入半間長五間半之綴、南入壹間長四間葺下ケ……本棟より東江五間梁二桁行四間、北入半間長四間之綴、東ノ方入壹間半長五間半葺下ケ……屋根惣瓦葺之事」とあり、寸法、屋根形状等から主棟の西半分と判断される。現在間取りは大きく改変されているが図6に描かれる主要な柱は現在もほとんどそのまま遺され、また、部屋境の鴨居も旧来の位置に遺り、図6の間取りに復元される。通り土間も、天井仕上げや鴨居の状況から1間半幅に復元される。書院は「四間半梁、尤外共ニ五間半、桁行五間半外ともに六間半、東ノ隅壹間梁長貳間之注文御湯殿、屋根瓦葺之事」とあり、桁行が図5、6の7間半、図4の8間と相違するものの、主棟の東半分に該当しよう。突出部である中門(注文)については、その位置、寸法、用途は図6に一致し、また現状からも、屋根形状(図3)は「壹間梁」を西に半間分下げおろしたものだと思われ、図6に「口」とある部分に庇の腕木の古い材が遺され、かつては風呂場であったと伝えられ(*注2)、図6の状況に復元される。火除門、裏門は共に図5に書き込まれている。

酒造蔵は「三間梁二桁行拾三間半……中程注文壹棟壹間梁二桁行三間室場之分」、同續酒造蔵は「三間梁二桁行五間」とある。これを図5と比較すると、「酒蔵」とある細長い付属屋が両者を合わせて描かれたものと思われるが、中程にあるとされる中門が描かれていない。一方、図6と比較すると、酒造蔵が「三間梁二拾四間」(図では9間半)の「蔵」として描かれ、梁行が2間であるものの桁行3間の「蔵」が「中程注文」に相応しく描かれているが、同續酒造蔵があると思われる場所は紙をはずれている。現状(図3)の道具蔵が古い酒造蔵の一部と伝えられる(*注2)が詳細は不明である。その他の付属屋は現存しない。

さらに、本家の項に記される突出部分をみると、「南ノ隅ちうもん貳間四方、南ちうもん貳間半梁二桁行五間、ちうもん南端より東江注文貳間梁桁行壹間半」とある。最初の2間四方のものは図6で西側の、次の2間半×5間は東側の「釜屋」にそれぞれあてはまり、これらは共に図5にも描かれている。しかし、最後の2間×1間半は図5には描かれているが、図6には欠落している。こ

れらも、現在は建て替えられている。

以上2つの中門の状況、および、資料①③の年代を考慮すれば、まず天保11年に図5の状態であったものに、酒造蔵中程に室場として中門が付せられた後、注進案に記録され、更にその後、本屋後部の中門が取り去られて図6の姿となった、とするのが妥当であろう(*注8)。敷地奥行寸法は注進案には記されてなく、図5の状態の後、図6では奥行が縮小されたのか、あるいは、同續酒造蔵部分を略したのか、不詳である。

従って、現状の主棟は天保11年以前より基本的な部分を受け継ぎ、後部の突出部、道具蔵を除く付属屋は天保13年を遡ることはない、と言うことが出来る。しかし、寛政元年の焼失後の再建経緯と、天保11年の絵図に示される建物との関係は、未だ明確になっていない。

4. 寛政元年焼失後の再建経緯と遺構の建築年代

天明年間に重就らが居住していた状態の三田尻御茶屋絵図、および、注進案の内容に基づく同復元図が明らかにされている(*注1)ので、前者に描かれ後者に描かれていない建物の中に、天保11年以後の兄部家と共通するものが発見されれば、それは寛政元年の焼失後三田尻御茶屋より移築されたものと判断されることになる。可能性のある建物の中で、重就の側室留楚、同千佐、娘雅

図3 兄部家現状屋根伏配置図

図4 兄部家現状平面図

図5 兄部盤右衛門処差図 (天保11年)

図6 兄部三蔵家差図

図7 三田尻御茶屋御住居之差図 (部分)

子が居住に用いていたと考えられる3棟の内の最も南に位置する1棟(図7)の間取りが、図4～6の書院棟に酷似している。

即ち、図7で最も格式の高い部屋は「御縁通り」とある入側を伴う8畳間と考えられる(*注9)が、これは現状(図4)で唯一長押の廻されている「ほんま」に当り、床の間や棚の現状は図7に一致する。他の5室も、押入等の撤去や後補はあるものの、そのまま受け継がれ、入側や縁の状況も一致する。建具についても、図7、6、4を比べると、図7の上側外壁部分が外雨戸であるのに対し図6、4で内雨戸となっている他は、矛盾しない。図7で檜皮葺きと表現される10畳(「御納戸」と推定される)の一面は、2階建て(*注10)で屋根材も異なり、また兄部家敷地にも納まらず、移築されなかったと思われ、代わりに宿泊時に必要な湯殿が新たに付加されている。図7の「御廊下」は1間幅と読み取れ、これは図6でやはり1間幅の「侍湯殿雪隠」に相当しようが、この部分は図6の状態の後、半間西へ増築されて現在に至ったもので、柱割(図4)の他鴨居(図4)や屋根隅棟(図3)の納まりが不自然である(*注11)。

図7に描かれる棟は、安永5年～天明3年に建築されたと考えられる(*注1)が、これと同時に建築され現在も三田尻御茶屋遺構の一部として遺されている、重就の御座間であった部屋(*注1)と柱間寸法を比較すると、共に6尺5寸であり、同時に建設されたものと考えて矛盾しない。

以上より、東側書院部分は、三田尻御茶屋内に重就の側室留楚、同千佐、娘雅子のいずれかの居住空間として安永5年～天明3年に建てられた棟の主要部分を、寛政元年の宮市町大火、重就死去の後、基本的な間取りを変更することなく移築したものであるということが出来、姫君の御殿であったものを移築した、という伝承(*注2)を裏付けている。

残る西側部分は、兄部家の生活や生業が営まれていた空間であり、書院部分より先に再建が必要となる。従って、この部分は注進案にも記されるように「本家」であり、「他ニ先立ッテ」建設されたと思われ、古材転用の跡もなく、『累代遺語抜萃』に言う右田毛利家より賜った材木で建築された部分に該当しよう(*注12)。

5. 平面構成、使われ方の特徴

注進案に本家、書院と記されるように、兄部家の主たる棟は専ら武士宿泊時にのみ用いられる書院部分と、兄部家の日常的な生活に用いられる本家部分から構成されていた。従って、武士宿泊に利用されない時は本家とその後側の付属屋とで兄部家の生活、酒造業としての生産が行われていた。武士宿泊利用時はどうであったか、に

ついては、図6には「六畳」「蔵」といった広さや形を示す当初よりの書き込みに加えて「御座間」「御家老」「御徒士」「上臺所」といった貼紙が付され、また、「宮市御泊御本陣兄部三蔵所差図」と付記され、このような宿泊利用時の各部分の使われ方を示した図であると考えられる。では、誰がいつ利用した折の状況を描いたものか、が問題になるが、毛利文庫に数多く遺されている御茶屋、本陣の絵図はほとんどが藩主の藩内巡視の記録と対応するもので、希に幕府よりの巡見使等が利用した場合にはその旨が記されている(*注13)こと、兄部家には藩主が休泊に利用してきた経緯があり、絵図の推定年代である注進案以後の時代にも藩主が利用した事実がある(*注14)こと等から推して、毛利藩主が宿泊に利用した時のものと考えて誤りなからう。

図6の貼紙を検討すると、兄部家の主たる棟は

- (1)「御納戸」「空間」を伴い「湯殿」「雪隠」を備えた藩主居所としての「御座間」「二之間」
- (2)「御家老」から「侍部屋」「侍」「御徒士」「足輕」そして「式臺」を挟んで「中間詰所」「溜間」までL字型に並ぶ扨従する家士の詰所
- (3)裏手から通り土間両側に配置されている「上配膳所」「上臺所」「御料理引当」「御用度人居所」等の台所部分

の3部分によって構成されていたことが知られる。これは三田尻御茶屋において藩政期を通じて設けられていた3部分と一致し、利用する建物の性格、規模等によらず藩主休泊時に必ず必要となる構成要素であると考えられる。御座間部分は床、棚、入側を備えた2室以上の構成であり、また、式臺が詰所部分にあり、一般の武士住宅や三田尻御茶屋に共通する。入側は「廊下折廻し」に結ばれ、台所部分に連絡されていて、休泊時の食事サービス等の状況がうかがえる。と同時に、廊下は詰所部分と台所部分とを区画する位置にある。裏の酒造蔵内には「御駕置所」とあり、藩主の駕籠の置き場に用いられた。

こうして見ると、酒造蔵の一部まで及ぶ兄部家建物のほとんどすべての部分が休泊者、扨従者の居所、あるいは、食事等のサービス用の空間に占められ、兄部家の家族、使用人等の生活や生業の場として使える空間は残されていないに等しい。これらの人々がどこで何をしていたか、が疑問となるが、直接これに答える資料は遺されていない。

図6のように兄部家が休泊に利用された時、家族や家人が一時的に生活の場として使うことが出来るような別の建物が兄部家敷地内、あるいは、近隣に用意されていた形跡はなく、従って、図6に示される利用時には、他の家へ移るか、あるいは、本来炊事等が出来るような備えを欠く、つし二階か裏手の付属屋に引き籠もっていたと推測される。

最後に、街道から兄部家に入出入りするための動線を見ると、東側より街道沿いに「本門」「式臺」「戸口」の3箇所の出入口が認められ、これらは図5にも描かれ、それぞれ先に挙げた3部分に対応している。即ち、「本門」を入ると「白砂」とある庭を経て御座間入側に設けられた「御駕臺」に達する。この動線は三田尻御茶屋には見られなかったものである。「式臺」は本家棟の家士詰所部分にあり、「戸口」は台所部分である通り土間への入口である。この両者は三田尻御茶屋にも見られたが、兄部家に見られるような街路に直接面する形式のものではなかった。藩主が兄部家に入出入りした時の動線を示す記録はないが、呼称から推して「本門」から入り、「御駕臺」に駕籠が付けられたと考えられる。また、図6においてこの「御駕臺」は貼紙ではなく当初よりの書き込みであり、図5にも描かれていることから、臨時的なものというより、むしろ恒久的なものであったと言えよう。

6. 結び

以上の検討から次の4点が指摘される。

- [1] 現兄部家遺構は寛政元年の焼失後の再建で、東側書院部分と西側本家部分からなる。まず、本家が毛利右田家よりの材木で建築され、次いで、安永5年～天明3年に三田尻御茶屋内に留楚、千佐、雅子のいずれかの居住用に建てられた棟が書院部分として移築された。
 - [2] 参勤交代時の他藩大名にも、藩内巡視時の毛利藩主にも利用され、藩主休泊時の状況を示すと推定される絵図によれば、その機能を果たすため藩主の居住部分、扈從する家士の詰所部分、台所部分の3部分が兄部家主棟内に設けられた。
 - [3] 上記の利用例では兄部家主棟の大部分が上記3部分によって占められたが、これとは別に家族や家人が独立して生活を営むための建築的な用意はなされていなかった。
 - [4] 街道に直接面する形で式台が設けられていたが、藩主はここから建物に入るのではなく、棟門→庭→御座間入側に設けられた駕籠台という動線で入ったと考えられる。
- 以上は毛利藩主が利用したと推定される事例を対象とした、主に毛利藩内の資料に基づく結論であり、さらに、通過する他藩大名の利用時等の検討が必要となろう。また、[3][4]に示される建築的特徴は、従来研究が進んで広く知られていた東海道の本陣（*注15）と大きく異なり、山陽道の本陣遺構（*注16）とも異なる一方、毛利藩内（*注17）や他の地方（*注18）の武士休泊施設には散見されている。従って、兄部家におけるこうした特徴が、例えば、本来別の性格の建物を移築した、というような個別的な理由によるものか、毛利藩内の本陣

に特有のものであるのか、あるいは、むしろ藩単位の特徴として毛利藩内の武士休泊施設全体に認められる特徴であるのか、さらには、より広範囲な全国レベルでの特徴の分布が認められてこれと関連するのか、と言った問題が次の課題として生じてこよう。これらの点については、さらに多くの例をふまえて検討を試みたい。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、実測調査に関して兄部次郎氏、および、防府市教育委員会原田勝美氏の協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

- 1) 拙稿「毛利藩における三田尻御茶屋について」（『日本建築学会計画系論文報告集』444, pp. 127～137, 1993. 2）
- 2) 兄部次郎氏談
- 3) 文献2 pp. 15
- 4) 明和3年(1766)の『山口宮市小郡御越之記』（山口県文書館蔵）に7代藩主重就の行動として「九半時宮市御着……御本陣兄部所被極御宿候間」とある。これは文献3 pp. 101にも同年の記事として「當祭礼之節、重就并澄姫御姫様（重就六女）、御長屋様（澄姫実母飯田利尾）當所為御歩行被遊御越候、中市兄部勘右衛門御本陣相成候事」と書かれている。
- 5) 文献2 pp. 8
- 6) 文献2 pp. 23
- 7) 『防長地下上申』（山口県文書館蔵）の右田村書出（寛延2年）に「古城跡と申伝候……城山共申来候」とある「観音堂南之峰」が記されている。
- 8) 図6に示される「三蔵」を名乗ったのは文献2 pp. 2の兄部家系図中、文政9年(1826)に死亡した24代佳忠とされ、注進案以降とする推定に矛盾するが、同系図で三蔵とはされていない23代盛長時代の寛政3年(1791)5月の記事として文献6に「三田尻才（宰）判宮市本陣兄部三蔵居宅去々酉年致焼失候……」とあり、代々兄部家当主は三蔵と呼ばれていたと考えられる。
- 9) 「三田尻御茶屋御住居之差図」（注1の図3）には、留楚、千佐、雅子の居住用の3棟が描かれ、いずれも平面はよく似ているが、この内図7に示した以外の2棟には、この8畳間に相当する部屋に「御居間」と書き込まれている。
- 10) 「三田尻御住居差図」（山口県文書館蔵）にはこの部分が2階建てであることが明確に描かれている。図7に「上り口」とある所が2階への階段である。
- 11) 図5と図6との間の時期に当たる注進案に書院の桁行が6間半と書かれていることから、図5、6に見られる書院棟西端の「侍湯殿雪隠」に当たる部分は、あるいは御茶屋から移築されたものではなく、架構的にも一体化していない後補のものであって注進案の記述では省略されたことも予測されるが、なお不詳である。
- 12) 現状では寄棟部分、接合部の梁伏図を採取するのが困難である。これが分れば東西両部分の建築順序や書院西側への増築の状況が明確になるので、将来的には解体修理等が待たれる。
- 13) 例えば「小郡御泊三原屋介市宅差図」（山口県文書館蔵）には「寛政四年夏幕府目附役廻国之際差出」と但し書きがされ、同じ但し書きのある「台道御宿上田少蔵宅中山安左衛門宅差図」（同蔵）には「遠藤中山守台道御宿」と付記されている。
- 14) 文献5 pp. 237に、文久3年(1863)9月15日の記事として13代藩主敬親が「三田尻茶館ヲ発シ宮市兄部方ニ休憩、夜ニ入中河

原茶館ニ帰ル」とある。

- 15) 東海道の本陣を対象とした文献11には、まず、休泊利用時には「本陣の家族は勝手居住の間に控へ、本屋の殆んど全部はこれを提供して用命に供へ……臺所・料理の間・調進の間が必ず座敷構の一部かまたは其の近くに置かれている。」(pp. 127)とされ、絵図等にも休泊者利用のための3部分を備えた棟(本屋)と本陣家の生活用の棟(勝手居住の間)とが共に本陣家として同一敷地内に描かれている(文献11pp. 141の東海道佐屋宿本陣加藤家絵図等)。また「長持・駕籠等の置場として入口に大なる板間を造る。」(同pp. 255)とある。次いで「敷臺を備へた玄関は必ず設けられている。而して表門内玄関までには数間乃至十数間の距離を置いて……」(pp. 259)とされ、寛政9年の『東海道名所図会』(人物往来社、1967)中の本陣図(pp. 246, 247)にもこうした玄関に駕籠が付けられている様子が描かれ、絵図等においても直接御座間入側にあがる動線は認められない。しかも、この2つの特徴を持つ本陣は、東海道宿駅では早くも天和2年(1682)に見ることができる(文献14)。
 - 16) 山陽道矢掛宿本陣石井家遺構は、やはり、通り土間を持つ主屋と書院棟とが結合された形であり、街道から門を経て書院棟に至る動線が設けられているが、その動線は書院棟内の家士詰所部分にある玄関に達しており、御座間入側に達する動線は存在していない。
 - 17) 正徳4年(1714)に萩城下にある有力商家菊屋家を毛利藩主の甥である支藩清末藩主が宿泊に利用した例を見ると、現在史料に指定されている遺構や同家に伝えられる屋敷絵図から、この当時の建築構成はやはり兄部家同様に武士休泊時に備えた家人用の建物が用意されていないものであると考えられる(文献7、pp. 28)。この休泊時の菊屋家の人々の様子をみると、日夜番人として手代、中間各2名を菊屋家に残して、他は井筒屋甚右衛門の新堀屋敷へ移っている(文献7、pp. 31)。また、動線については、菊屋家絵図によれば、書院座敷前の庭へ入る門に「御成門」と書き込まれ、これとは別に主屋に「敷臺」が設けられている。
- 一方、毛利藩の支藩である長府藩内の西市(現山口県豊浦郡豊田町)にあって酒造業を営み本陣とも呼ばれた中野家は、文政13年(1830)に建てられ昭和初期に取り壊された同家の平面図(文献10、pp. 233, 234)によれば、書院座敷、通り土間のある主屋、酒造蔵を主な構成要素としており、兄部家に共通し、長府藩主、幕府巡見使等の休泊に利用されたが、「巡見上使が宿泊の日は、中野家の家族は全員別の家に移り、本陣は接待の役人に開け渡していた」(文献10同上)とされている。また、道から「本門」を入ると書院座敷前の庭に直接出る形をとり、主屋には別に、道に直接面する「式台」があって、兄部家と同一形式と言える。
- 18) 会津藩の滝沢本陣横山家は延宝6年(1678)の建築と推定され、2室構成の御座之間と広間型3間取りの主屋とから構成されるが、絵図によれば、当初式台は設けられず、主屋の座敷部分が三之間、御膳仕立所、控之間等に用いられ、道に面する「御入御門」から書院入側へ直接上る動線が設けられている(文献9)。また、仙台藩内の奥州街道宿駅中田宿で元禄3年~享保19年に仙台藩主の休泊に利用された佐藤家では、元禄年間に「書院」が建てられていた(同家蔵『永留帳』)が、「大守様被相入之砌ハ家財等被運居家迄御用立申故、酒蔵ニ引込被有ニ付……」(同家蔵文書、元禄5年3月11日)とあり、書院と居家を明け渡して酒蔵に引き籠もっていた。

参考文献

- 1) 『防長風土注進案』第1~22巻、天保13~弘化、山口県文書館蔵
- 2) 石川卓美:「防府と兄部家」(防府市教育委員会編『防府史料』第18集、1971)
- 3) 「防府天満宮大小行司記録」(同第19集、1972)
- 4) 『毛利十一代史』公爵毛利家蔵版、明治40
- 5) 時山弥八:『もりのしげり』私家版、大正5
- 6) 『三田尻宰判本控』第1~33巻、寛延元~明治4山口県文書館蔵
- 7) 『史跡萩城下町(菊屋家旧宅)修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会、1983.3
- 8) 『重要文化財菊屋家住宅修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会、1981.3
- 9) 『旧滝沢本陣横山家住宅修理工事報告書』文化財建造物保存技術協会、1978
- 10) 『豊田町史』、豊田町役場、1979
- 11) 大熊喜邦:『東海道宿驛と其の本陣の研究』、丸善、1942
- 12) 大島延次郎:『本陣の研究』、吉川弘文館、1955
- 13) 上野邦一:『宿場と本陣』(日本の美術285)、至文堂、1990.2
- 14) 小野木重勝ほか3名:「天和年間における東海道赤坂宿の本陣・脇本陣・旅籠」日本建築学会大会学術講演梗概集、pp. 2495, 2496、1982.10

(1993年4月5日原稿受理、1993年10月6日採用決定)